

## いま『文選』を読む―中国古典文学の規範とその距離

### 前言

古典文学、ことに中国の古典文学は、文学の因襲のなかでおのずと定められた規範が強く支配するとされる。では、彼らが「規範」としたもの、彼らの文学の「核」となるものとは、どのようなものであったのだろうか。そのような中国古典文学の「規範」を探ると同時に、その「規範」と個々の文学事象との距離をはかることによって、そこに中国の古典文学を問い直し、新たな問題領域を切り拓く可能性も見えてくるのではないだろうか。

このような問題意識の下、今回のパネルディスカッションでは中国古典文学の規範の一つとして『文選』をとりあげ、規範／古典と

しての『文選』について考えるときにも、『文選』と各時代（唐宋から明清）、各領域（詩文・説話・白話小説）の文学事象との距離を問い、そこから見えてくる問題を考えることとした。

では、この規範／古典としての『文選』に、我々はどのようにアプローチすべきなのか。ハルオ・シラネ氏は、西洋におけるカノン理論の二つのアプローチについて、次のように述べる。

歴史的に見た場合、西洋におけるカノン理論には、大まかに言って二つのアプローチがある。テクストのなかに基礎的根拠のない基本原則を見る基本主義者（foundationalists）は、カノンに含まれるテクストが、なにかしら普遍的で不変、ないしは絶対的な価値

佐藤 大志  
陳 獅  
中木 愛  
高西 成介  
川島 優子

を体現していると考ええる。(中略—引用者)二つ目のアプローチ(こちらが今日一般的なものだが)は反基本主義的なものであり、テキスト自体には基本的根拠などない、カノンに選別されたテキストは、ある時代のある特定のグループないし社会集団の利益・関心を反映したものに他ならない、と考える。反基本主義者の立場では、なにかしら不変で自明なものを想定させる古典および伝統という概念を言外に批判しつつ、それに代えて、闘争と変化を含意するカノンという言葉が使われるのである。そこで前提となっている認識は、伝統は文学の上での古典と同じく、単に存在するのではなく、支配的なグループないしは制度・機関によって構築されるのだということである。

この二つのアプローチのうち、我々は後者の反基本主義者の考えの、「カノンに選別されたテキストは基礎的根拠を含まない」という点については留保したうえで、『文選』の規範性や古典としての価値を自明のものとするのではなく、『文選』の規範／古典としての価値が構築されていく様相を辿り、規範／古典としての『文選』の問い直しを試みた。

そもそも『文選』は、ほんとうに規範／古典だったのか。もし仮に『文選』が規範／古典であったとすれば、それは誰にとつての規範／古典だったのか。またどのような意味で規範／古典だったのか。このような問いを重ねることで、『文選』と各時代、各領域、また各人との距離を考え、さらにはそのように『文選』を問題領域としてとらえることで見えてくる問題を浮かびあがらせてゆくことができるのではないか。

この規範／古典としての『文選』とその展開を考えるために、我々は、隋、唐、宋、元、明、清の四つの時代に区分し、それぞれの時代の『文選』をめぐる問題を分担して報告することとした。まずは隋、唐、宋、元、明、清の『文選』学は隋の蕭該の『文選音』に始まり、曹憲の『文選』学、それを継承した公孫羅や李善の注釈と学問によって、その価値を高め、さらに科挙との関連もあって、唐代の文人たちにも広く読まれ、特に杜甫は本文のみならず、李善の注を含めて『文選』を熟読していたとされる。

この隋、唐、宋、元、明、清の『文選』学は、隋の蕭該の『文選音』受容の実態はどのようなであったのか。今回はその問題を、陳氏は、李白と杜甫を例として、唐人の『文選』の受容を中心に、中木氏は、『文選』所収作品の語句を例として、『文選』李善注の受容を中心に、それぞれ報告した。

次に宋代においては、北宋初期には唐末の『文選』重視の風潮をうけて『文選』が重視されていたが、北宋中期には『文選』の価値が一時衰退していく。そして、この北宋期の『文選』盛衰の状況を語る南宋期の詩話において、規範／古典としての『文選』に対する認識が新たに形成、或いは強化されていく。この宋代における『文選』観については、佐藤が報告した。

また元明期は、科挙において詩賦を課すことが廃止されたことにより、『文選』の価値が著しく低下した時期と考えられる。元明の筆記小説には、科挙受験生が『文選』の名前すら知らないという現状を嘆く記述も見え、『文選』と科挙との距離が遠くなり、規範／古典としての『文選』にゆらぎが生じた時代と捉えることができる。この元明期の『文選』については、高西氏が隋唐から元明にかけて、

説話や筆記小説のなかで、『文選』がどのように語られてきたのか、その変容の過程をたどり、川島氏は、明代に始まる『文選』の評点本について、その評点の特徴とそこから見えてくる問題について報告した。

最後の清代については、科挙に於ける詩賦の復活と考証学の隆盛によって、『文選』と李善注が再評価され、それが近現代の『文選』認識へと展開してゆくと考えられる。しかし、現段階ではまだそれは仮説の段階であり、今回は今後の展望のみを記すだけにとどめておきたい。

現在、我々は広島大学の修了生を中心として、『文選』とその李善注に関する共同研究を計画しており、今回のパネルディスカッションはその研究の一環として、規範／古典としての『文選』をめぐる問題を、各時代、各領域の問題との関係から読み解くことを試みたものである。五名のパネラーはいずれも、これまで『文選』を専門として研究してきた者ではなく、それぞれの専門領域と『文選』との距離も互いに異なっている。互いに異なった立場から、規範／古典としての『文選』について考え、それぞれが研究対象とする時代や領域の文学と、『文選』との距離について考えたとき、そこにどのような『文選』の姿が浮かび上がるのか。今回はその最初の報告であり、今回の報告を経て、規範／古典としての『文選』をめぐる問題を更に深めるとともに、『文選』をめぐる問題を他の領域へと開くための契機としたいと考え、諸賢の忌憚のないご意見とご批評を仰ぐ次第である。

(佐藤大志)

(一) 川合康三『規範と表現―『文選』詩の初めの部立てを中心に―』、『東  
方学』第百三二輯 二〇一六。

(二) ハルオ・シラネ著、衣川正晃訳「総説 創造された古典―カノン形成  
のパラダイムと批評的展望」(ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造され  
た古典 カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社 一九九九)

### 一 李白・杜甫の詩歌創作における『文選』の受容 ―「静夜思」と「春望」を例として―

本報告は、唐代における『文選』の受容というテーマに焦点を絞って、李白の「静夜思」と杜甫の「春望」を具体例とし、唐宋期の詩文と『文選』との距離を改めて問い直し、『文選』及び李善注に基づく中国古典文学の再解釈について、二三の私見を提示する。

まず、李白の自作である「静夜思」を材料とし、李白の詩文創作の実態と『文選』作品との関連について探ってみたい。周知のように、李白の「静夜思」は、かねてから一般に世に流布した本文と、李白別集の本文との間に、幾つか重要な文字異同を見せていた。ところが、南宋末元初の文人范德機の『木天禁語』を調べてみると、その「五言古篇法」の一節に、「忽見明月光、疑是地上霜。起頭望明月、低頭思故郷」という従来全く知られていなかった「静夜思」の新バージョンが記されていることが新たにわかる。

さらに、この新本文の発見によって、「静夜思」の背後にも、『文選』作品という土壌が存在している可能性が指摘できる。詳しく分析していくと、『文選』巻二九に収録された魏文帝曹丕「雜詩二首」、特にその第一首は、「静夜思」に詠じられている情景がほぼ全て含まれていることが看取できる。また、「静夜思」と魏文帝詩の詩語を整

理してみると、両詩の間に明確な対応・継承関係が存在していることも容易に見られる。これによって、現存する各バージョンの「静夜思」本文に見られる文字異同は、その原典である魏文帝「雜詩」が存在していたからこそ生じたものであると推察できる。この「静夜思」は、まさしく李白詩文における『文選』受容の痕跡を辿る一好例とも言えよう。

続いて、杜甫の場合も検討してみよう。ここでは、杜甫の名作である「春望」を取り上げる。まず、「春望」首句の「国破」の「国」は、従来二通りの解釈が存在している。一つは「国家」と解釈し、もう一つは「国都」、つまり「都・長安」と解釈する。「国家」という解釈は、元々吉川幸次郎氏が宋代の郭知達『九家注杜詩』の注釈に引かれた劉琨「答盧諶書詩一首並書」(『文選』卷二五)の典故に基づいて指摘する説である。しかし一方、『九家注杜詩』を除き、宋代の『千家注』をはじめとする数多くの杜甫詩注釈書は、何れも劉琨詩を典故として採用しておらず、現在の杜詩注釈史においても、その「国」を、「都・長安」とする解釈が主流である。ただし、後藤秋正氏の考証によれば、唐詩において「国」を「都・長安」とする用例は存在していなかったことがわかる。これによって、「都・長安」という通釈が成立し難いものであることが判明する。

だとすれば、杜甫の「春望」は、『文選』の劉琨「答盧諶書詩一首並書」を出典としている可能性が高まってくる。ちなみに、劉琨の作品は、匈奴の劉琨によって西晋が滅亡された際に作られたものである。ここで李善は「国破」の注に、崔鴻の『前趙録』を引いて、劉琨がまず僭位し、そして洛陽を陥落させ、さらに長安を攻め落とした記事を引用する。これはまさしく劉琨をめぐる当時の情勢が、

安史の乱における安祿山の僭位、洛陽・長安への侵攻とほぼ同じようであったことを示している。さらに、従来指摘されていないが、劉琨詩の後半に、「山河」という言葉も見え、杜甫は「春望」を詠じた際に、安史の乱の戦争展開と相似している劉琨詩を真っ先に想起したのではないかと推測できる。ちなみに、『文選』に収めている「異民族との戦争」をテーマとした名作とえば、劉琨詩の他に、沈約の「応詔樂遊苑餞呂僧珍詩」(卷二〇)もすぐ想起される。この沈約詩を調べると、杜詩末句の「渾欲不勝簪」は、沈約詩の「將陪告成礼、待此未抽簪」の字面を襲った表現である可能性が浮上してくる。さらに、杜詩首句の「山河」という言葉も、本詩の李善注に見える『尚書』武成篇にいう「柴望、大告武成也」に対する釈義の一部に由来するとも考えられる。或いは杜甫は、まず『文選』に収録されている異民族の戦争を歌う名作を想起しながら、「春望」詩を構想し、それらの詩から詩語を選び出しアレンジを加え、さらに必要に応じてその李善注を踏まえて新しい言葉を創出するという創作過程を経たのではないかと推測できる。(陳翀)

(一) 吉川幸次郎著・興膳宏編『杜甫詩注 第三冊』(岩波書店 二〇一四)を参照。

(二) 後藤秋正『春望』の『国』について(『東西南北の人―杜甫の詩と詩語』所収 研文出版 二〇一一)を参照。

## 二 作品と李善注の距離から考えること

― 殷仲文「南州桓公九井作」の  
「広筵散汎愛、逸爵紆勝引」句をめぐる―

『文選』は唐代にかけてひとつの規範となるが、李善注はどうだったのか。今回の発表では、殷仲文「南州桓公九井作」(『文選』卷二二)を材料として、唐代の作品と李善注との距離から考えられることを述べた。

この詩には、宴席のようすが「広筵散汎愛、逸爵紆勝引」(広筵に汎愛を散じ、逸爵は勝引に紆る)と描かれている。「汎愛」は李善注が指摘するとおり『論語』学而篇の「汎愛衆而親仁」(汎く衆を愛して仁に親しむ)に基づき「広い愛、めぐみ」を表す。「勝引」はここに初出の語で、李善注は「勝引、勝友也。引、猶進也、良友所以進己、故通呼曰勝引」(勝引は、勝友なり。引は、猶ほ進のごときなり、良友は以て己を進むる所なり、故に通呼して勝引と曰ふ。)という釈義のみを記して「良き友」と解釈する。この言葉は『文選』以降継承され、「良き友」という解釈も現在まで広く行われている。

ところが、唐代の「勝引」の例を見ると、友ではなく景勝や遊覧といった方向で解釈できそうなものが見受けられた。たとえば淮陰県の名所旧跡を紹介した記述に見える「勝引、飛轡、商旅接轡」(勝引は轡を飛ばし、商旅は轡を接ふ)〔李邕「楚州淮陰県婆羅樹碑」、『李北海集』卷四〕や、山に囲まれた清らかな景色を描いた詩に見える「勝引、即紆道、幽行豈通衢」(勝引は即ち道を紆る、幽行豈に通衢ならんや)〔孟郊「立德新居十首」其一、『孟東野集』卷五〕などの「勝引」が個人との関係性を示す友の意味とは考えにくい。病の母親に尽くした孝行息子の描写「每至良辰美景、勝引佳遊、必扶持左右、笑言陳説。」(良辰美景、勝引佳遊に至る毎に、必ず左右に扶持し、笑言陳説す。)(顔真卿「通議大夫守太子賓客東都副留守雲騎尉贈尚書左僕射博陵崔孝公宅陋室銘記」、『顔魯公文集』卷一四)の「勝引」

も「佳遊」と同義と考えられる。

そもそも李善注には不自然な点も認められる。「引」字には、進める、誘うといった意味があるが、「勝引」をそういった行為の主体とするには飛躍がある。また李善注はこれを「通呼」(世に広く用いられる呼び方、類似の表現に「通稱」「通言」がある)というが、調査の限り同じような例は見つかっていない。

唐代に李善注の解釈が当てはまらない例が存在するならば、『文選』の二句にも再解釈の余地が現れる。にわかに李善注を無視することはできないとしても、少なくとも、唐以降の作品を読むとき李善注に完全に依拠した解釈には慎重でなければならぬ、ということと言えるだろう。現に、唐代の「勝引」の語に施された注釈を見ると、解釈は一定していない。宋以降の詩文にも、「勝引」を「友」の意味で用いるもののほか、景勝や遊覧の方向で読み取れそうなのが見受けられた。

一方、この李善注を別の形で自らの創作に活用した詩人もいた。杜甫である。杜甫は、殷仲文の詩で「勝引」と対になっていた「汎愛」の語を晩年に四回用いるが、その使い方が注目される。「広い愛」という意味ではなく、「広い愛を及ぼしてくる人」の意味に転化して用いているのである。この着想は「勝引」を「友」と解釈した李善注から得たものであろう。杜甫が、李善注まで熟読し、『文選』の表現に独自のアレンジを加えて『文選』を超えようとしたことが見て取れる。

さらに宋代、杜甫の詩に付された趙次公の注では、友のことを「汎愛」と呼ぶ例として殷仲文の句を挙げており、趙次公が杜甫の詩を通して『文選』を解釈した痕跡が確認できた。これは、宋代の『文

選』受容の背景をも反映している。

『文選』と作品、あるいは李善注と作品の距離をはかることは、個々の作品理解を深めるうえで、有効な方法のひとつと言える。両者の間に隔たりが認められれば、李善注に拠りがちな解釈の再検討や、創作メカニズムの新たな解明につながるであろう。李善注そのものの性格を究明する一助にもなるかもしれない。(中木愛)

(一) 個別の作品の解釈については、なお検討すべき点が多く残っている。

当日のシンポジウムや発表後に諸先生方から頂いた貴重なご意見をもとに、今後考察を深めたい。

(二) たとえば、孟郊「立德新居十首」其一の「勝引」について、華忱之

・喻学才『孟郊詩集校注』(人民文学出版社 一九九五)は、李善注に即した解釈を記したあと「又指引入入勝的景色或境地。」と加える

### 三 南宋期の詩話における『文選』の盛衰と再評価

規範／古典としての『文選』の問い直しという本シンポジウムの問題に即して、宋代、特に南宋期の詩話における『文選』に関する記述を分析し、そこにかがえる南宋における『文選』言説の形成について報告したい。

『文選』が広く浸透していたことを物語る記事として知られる南宋・王应麟『困学紀聞』は、その末尾に「熙・豊之後、士以穿鑿談經、而選学廃矣。」(熙・豊の後、士 穿鑿談經するを以て、選学廢れり。)と、神宗期の熙寧・元豊年間以後に「文選学」が廢れたと記す。この熙寧・元豊年間以後の「文選学」の衰退は、新法党の科挙改革によって、進士科において詩賦を課することが廢止され、經書の

解釈が重視されたことが原因とされている<sup>(一)</sup>。宋代では新法党が実権を握った時期を除き、基本的には科挙では詩賦が課されており、南宋まではこの状況に変化はなかったとされるが、『困学紀聞』と類似する記事は、他にも南宋の詩話中に見え、そこには唐末から北宋初期までは広く文人たちの間に浸透していた『文選』が、北宋中期以降にはその価値が下がり、軽視されるようになっていったとする認識が看取できる。

そして、この北宋期の『文選』軽視の風潮を前提として、南宋の詩話の中には『文選』の価値を再評価しようとする発言が見られる。例えば、南宋・胡仔『漁隱叢話』には、北宋末・郭思『瑤溪集』からの引用として、杜甫が我が子に『文選』の理に熟達せよと教えたこと、それは奇を愛するが故ではないことを述べたうえで、もし詩を作るのであれば、『文選』に熟達しないわけにはいかないと言い、さらに『文選』は文章の祖宗で、両漢から魏晋宋齐の優れた作品を集めたものであつて、文章を作る者も『文選』を尊ばないわけにはいかない<sup>(二)</sup>と主張する。

さらに張戒『歲寒堂詩話』でも、まず杜甫が我が子の教育に『文選』を用いたことを挙げたうえで、最近の士大夫は、蘇軾が『文選』の作品の取捨選択を誇ったこと<sup>(三)</sup>によって、『文選』に意を留めなくなったこと、さらに『文選』には秦漢魏晋の奇麗の文が尽く収められており、詩や賦そして四六駢儷文を作るうえで『文選』は<sup>(四)</sup>忽せにできない書物であると述べる。

このように南宋の詩話中における『文選』の記事をたどっていくと、そこには北宋中期以降、『文選』の価値が低下したという認識の下、南宋期には『文選』を再評価しようとする動きがあったことが

読み取れる。そして、その再評価の過程において、杜甫や蘇軾と『文選』との関係、詩と『文選』との結びつきなど、後世の規範／古典としての『文選』観を形づくる認識が形成され、強化されてゆくようである。

この南宋期の『文選』の再評価の背景には、宋代に於ける杜甫や蘇軾の評価、また詩と文との関係、個々の詩話の書き手をめぐる問題などがあると考えられる。また同時代の文学に対する対抗言説としての文学批評という側面も考慮しなければならないであろう。そして、それは『文選』が誰にとつての規範／古典であったのかということを考える糸口となるであろう。

今回の報告では、南宋期の詩話中における北宋期の『文選』衰退と南宋期の『文選』再評価という現象を指摘するにとどまってしまうが、この現象の解釈については、発表後に諸先生方から頂いた意見を踏まえつつ、ひきつづき考えてゆきたい。(佐藤大志)

(一) 駱鴻凱『文選学』(中華書局 一九三六)「源流第三」参照。

(二) 高津孝「科挙制度と中国文化―文化的多様性の拘束―」『東洋文化研究』七号 二〇〇五) 参照。

(三) 陸游『老学庵筆記』は仁宗の慶暦年間以降、その陳腐さが嫌われて『文選』は一掃されてしまったと記し、曾季狸『艇齋詩話』は北宋末から南宋初めの詩を学ぶ者は、蘇軾や黄庭堅の詩を学ぶに止まり、優れた者でも杜甫までで、『文選』を学ぶことを勧める者はいなかったと記す。

(四) 胡仔『漁隱叢話』前集卷九に「瑤溪集云、子美教其子曰、熟茲文選理。文選之尚、不愛奇乎。今人不為詩則已、苟為詩則文選不可不熟也。文選是文章祖宗、自向漢而下、至魏晉宋齊、精者斯採、萃而成編、則為文章者、焉得不尚文選也。」とある。

(五) 張戒『歲寒堂詩話』卷上に「杜子美云、統兎誦文選。又云熟精文選理。然則子美教子以文選歟。近時士大夫、以蘇子瞻譏文選去取之謬、遂不復留意。殊不知文選雖昭明所集、非昭明所作、秦漢魏晉奇麗之文尽在、所失雖多、所得不少。作詩・賦・四六、此其大法、安可以昭明去取一失而忽之。」とある。

#### 四 語られる『文選』

「中国文学の精髓」と評される『文選』であるが、そもそも中国の人びとはこの書をどのようなものととらえていたのであるうか。そのことを考える一助として、今回の発表では、『文選』所収の個々の作品ではなく、『文選』という詩文集そのものがどのように人びとに「語られて」きたのか、唐代から明代までの小説や筆記を主たる材料として概観してみたい。

梁代に編纂された『文選』は、唐代に入るとその難解さゆえに、李善らによって注釈が附され、皇帝に献ぜられることとなった。また、唐代に始まる科挙に際しては、必ず学ばなければならない書物とされるようになる。これらの事象は、唐代に『文選』の正典化、規範化が確立したことを意味する。このような『文選』は、数は少ないながらもいくつかの説話の中で語られている。例えば『朝野僉載』には、郷学に化けて『文選』を講じる狐が登場する。六朝から唐代にかけて、経書や史書に通じた狐(学狐)がしばしば語られるが、『文選』もまた経書や史書という正典たる書物と同格の書物であると思なされていたからこそ、このような話が語られたのである。また一方、『文選』を読めないことを揶揄する笑話も存在する。

例えば、『大唐新語』には、班孟堅と班固を別人だと勘違いし、班固ほど優れた人物の文章が『文選』に含まれていないことを歎く、張由古なる小吏のエピソードが見える。『文選』がこのような笑話の材料として用いられるのは、『文選』正典化の裏返しと言ってよいだろう。

唐代に、こうして『文選』が正典化し珍重されていく中で、昭明太子が配下の文人たちと『文選』を編纂した場所とされる「文選楼」もまた、伝説化していくことになった。「文選楼」とされる場所も、襄陽、揚州、池州など各地に広がり、『文選』編纂をめぐるさまざまな異聞が語られていくことになる。これはまた、『文選』が特別な書物であるという認識が、広範な人々の間に広まっていたことを示している。

宋代になると、「文選楼」伝説が広まるその一方で、書物としての『文選』と知識人との関係が転機を迎え、その地位は徐々に低下していく。このことは、佐藤氏の報告に詳しい。さらに南宋の時期を最後に科挙の試験から詩賦が廃止されると、『文選』学習はかつてほど重要視はされなくなっていく。

明代になっても、科挙において詩賦は廃止されたままであった。

その結果、明代を通じて『文選』を学ぶことに対しては、関心は低いままであった。田藝蘅は、『留青日札』巻五において、「いま科挙の勉強をしている者つまり秀才であるが、『文選』に至っては、生まれてこのかたその名前を聞いたことがないありさまで、そんなことでは『文選』に通じその意味を理解することなどどうもできない。このような連中は蠢才（ばかもの）と言ってもよかろう」と、進士でありながら『文選』を学ぼうとしないことを痛烈に批判している。

この逸話が示すように、かつては科挙に必須であった『文選』も、明代にあつては多くの受験生にとつて、科挙の合格には役に立たない、非実用的な書物として語られるようになっていたのである。換言すれば、「役に立つか立たないか」「実用的か非実用的か」を基準として、学芸の価値を測る時代が到来したと言いうこともできよう。

一方、こうした流れにさからう言説も明代に見出すことができる。先にあげた田藝蘅や、後七子の一人宗臣などは、『文選』はこうした「実用」か「非実用」かという二元論では測れない価値を持つことを述べる<sup>(五)</sup>。これは、科挙から自由になった『文選』を、改めて文学作品として再評価しようとする動きにほかならない。『文選』にとつて明代は、新たな展開を予想させる過渡的な時代であったのかも知れない。

(高西成介)

(一) 『太平広記』巻四四七狐一「張簡」

(二) 李劍國『中国狐文化』（人民文学出版社 二〇〇二）七四頁〜七七頁

参照。

(三) 『太平広記』巻二五八嗤鄙一「張由古」

(四) 嗟乎、今之能学举子業者即謂之秀才、至于文選則生平未始聞知其名、況能爛其書、析其義乎、雖謂之蠢才可也。

(五) 例えば、宗臣「三報張範中」（『宗子相集』巻一四）に、「千載榛蕪李何再闢、俾海内学士大夫重睹古昔、譬則鳳麟在郊、群心快之。且鳳麟之為天下瑞也、求其耕疇而駕遠也則謝牛馬。而世卒不屈鳳麟于其下者以其文也、以其文非以其用也。而世之論文者、乃責其亡用于世、則何以責鳳麟乎。謂鳳麟之文而亡用可也。謂鳳麟之文而亡用、而不及牛馬也、即婦人孺子而笑之。文選者鳳麟之迹也、而鄙之以為不足誦、是謂鳳麟之不能耕駕、而鄙之者也、非忌則愚。」とある。



## 五 明代の『文選』

— 凌濛初編『合評選詩』を中心として —

明代において、『文選』はどのような人々に、どう読まれていたのだろうか。本発表では、明末における『文選』の在り方の一端を探るべく、当時多く作られた『文選』の評点本の中から、凌濛初によって編纂された『合評選詩』を取り上げて考えてみたい。

『合評選詩』は『文選』の詩の部を全て抽出し、そこに李善から鍾惺・譚元春に至るまで古今四十名ほどの著名人の注や評を集め付した、朱墨二色刷の套印本である。『合評選詩』を取り上げる理由としては、まずその評の形式（題下評、眉批、傍批、総評）が他の評点本に比べて充実しているという点、またこの書が当時あつて好評を博したと思われる点、さらに編者が凌濛初だという点にある。

凌濛初は呉興烏程で出版業を営む凌家の出身で、彼自身数多くの書籍を編纂刊行している。また「二拍」（『拍案驚奇』）「二刻拍案驚奇」の編者として、戯曲作品を手がけた人物としても知られる。つまり凌濛初は、出版あるいは俗文学という、明末を考える上で鍵となる分野に精通した人物だといえよう。

『合評選詩』の評語を具体的に見ていくと、『文選』を理解するための基礎的な知識や文学史的な知識に関するものが多く見受けられる。また『文選』が後世の作品、特に李白や杜甫といった著名な詩人にどのような影響を与えたのかについてもたびたび言及される。こうした注や評からは、様々な『文選』情報がダイジェストで紹介されているという印象を受ける。つまり『合評選詩』は、手っ取り

早く『文選』についての知識を得ることができる「あんちよこ本」のような性質を持つものだったと考えられるのである。

実際、明代に多く編まれた『文選』の評点本は、『文選』の入門書、さらには科挙受験生のために作られた参考書的なものであったという指摘がある。しかし一方で、『合評選詩』には、単なる受験参考書というだけでは理解しがたいような評も多く集められている。それが、詩の「添削」ともいえるべきものである。そもそも『合評選詩』には全体を通して圈点が施され、句の善し悪しが一目でわかるようになっていたのだが、具体的にどこがどうよいのか、あるいは悪いのか、詩全体の構成、句、文字の使い方の如何について評価が加えられているのである。こうした評語を参考に、作詩の練習が行われたのではないかと考えられなくはないが、「庸語」「起好」「結醜」といった感想めいたものまで集められており、発表者はむしろここに白話小説との類似性を感じずにはいられない。

明清の白話小説の多くは批評を有しており、たとえば『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』『金瓶梅』なども、一般に流通したテキストは、李卓吾や金聖嘆、毛宗崗や張竹坡といった人物の批評を伴うものであった。小説は批評とセットで読まれたのである。たとえば「李卓吾先生批評忠義水滸伝」を見てみると、そこにもやはり文章の善し悪しに関する評語（「好文章」「画」「妙」「可刪」等）が大量に確認できる。白話小説はこうした有名人たちの実況解説付きで読み進められることが一般的であり、そうした批評込みでひとつの「娯楽」だったと考えられよう。

『合評選詩』は、歴代の著名人たちの解説が集められ、『文選』を語れる知識が効率よく得られるような構成になっていた。さらに白

話小説同様、詩の善し悪しに関する実況解説も付いてくる。しかもこうした部分については、当時流行していた鍾惺・譚元春の『古詩歸』からの引用が主である。『合評選詩』は、真面目な参考書や受験対策本というよりも、解説なしには『文選』を理解するのが難しかった層をターゲットにした、ある種の「知的な娯楽本」ともいうべき性質を持つものとして、濛濛初という俗文学にも通じた大手の敏腕編集者の手で、戦略的に生み出されたひとつの『文選』の形だったのではないだろうか。

『合評選詩』からは、従来型の知識人層の専有から解放され、規範的な「古典」という枠組みからも解き放たれた『文選』の姿を垣間見ることができた。印刷技術の進化に伴って読者層が広がり、読者層の変化によってメディアが変わり、メディアの変化によって古典の変容がもたらされた一例とも言えよう。(川島優子)

(一) 趙俊玲『《文選》評点研究』(上海古籍出版社 二〇一三) 参照。

(二) 趙俊玲『《文選》評点研究』(上海古籍出版社 二〇一三)、王小婷『清代《文選》学研究』(上海古籍出版社 二〇一四)等。また、表野和江

「明末呉興凌氏刻書活動考―濛濛初と出版―」(『日本中国学会報』第

五〇集 一九九八)等、そもそも套印本というスタイル自体が受験対策仕様だったという指摘もある。